面会した父は雄々しかった

都筑区支部　野崎　逸郎（子）
戦没者　野崎　利守
戦没地　フィリピン

父が三十五歳で戦死して、今年で六十五年経つ。ひとり残された母は、父のあまりにも早かった死で、その寿命の残りを全部もらったのであろうか、百歳を目前にして三年前に他界した。父が三十四歳で応召した頃、私たち一家は九州の北端、当時の門司市（現北九州市門司区）に住んでいた。母は三十五歳、私は国民学校（現在の小学校の当時の呼称）五年生であった。

この港は、明治二十七年（一八九四年）の日清戦争から、中国大陸への門戸として、貿易港としての発展を遂げていた。中国大陸に戦火が広がり、さらに太平洋全域に戦場が広がるにつれて、門司港は軍事輸送の拠点となり、輸送船の出港地としてフル活動した。

父が兵隊に取られてから、父と面会したのはこの関門海峡を挟む南北の港、下関港と門司港の二度だけである。自宅で別れていらい一度も面会できなかったご遺族も多くおられるのに、輸送船の出港地であるという偶然が幸いして、父と会うことができたのはせめてもの幸せであった。

昭和十八年六月十七日、私は学校から急遽呼び戻された。父から、「下関から満州に出征する

©2011_財団法人神奈川県遺族会

から面会に来い」と連絡があった。母と私は、あたふたと関門連絡船で対岸の下関駅に渡った。熊本の野砲連隊に入隊したのが同じ月の三日、まだ二週間しかたっていない。行き先は不明とかで教えてもらえず、結局分かったのは七月六日に届いた軍事郵便で、駐屯地は満州の北の端、ハイラルというソ満国境の町だと分かった。

下関駅の引き込み線での面会時間は三十分。そのとき母は父に尋ねたのは、私的制裁で何度くらい殴られたかということだった。「兵隊は殴られれば殴られるほど強くなる」と平成の今日でも戦友会や追悼式に出席の生還者が、このような言い方をされる。戦争中の留守家族は、夫や息子や兄や弟が、兵役と言う名の拘束の環境の中で、どんなにつらい目に遭っているかを耳学問で良く知っていた。自分の夫や息子が、どのような失敗で殴られているかをいちばん心配していた。庶民から突然召集されて、人殺しの訓練を受けさせられ、その出来が上官のお気に召さねば、見せしめに殴られるということは当時公然とではないが国民周知のことであった。こともあろうに、母はそんなことを父に尋ねた。父はきっとして「馬鹿野郎」とひとことといった。「そんなことを俺がお前に言えると思うか」そういう意味の「馬鹿野郎」だったのだろうと幼い私は受取った。

その一年五カ月後、父は再び関門海峡を経由、今度は門司港から行き先を告げずにルソン島マニラに向かい、中部ルソンの国道三号線上で米軍戦車と交戦して死(めかり)んだ。

母とこもごも、中隊の海路平安と武運長久を祈りに参拝した和布刈神社の境内で握った父の手がとても温かかった。

©2011_財団法人神奈川県遺族会